

# くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-61 岐阜県羽島郡川島町 Phone: 058689-2101



## 企画展 病む目とめくすり

1993年5月1日～11月28日

「目は口ほどに物を言い」「目は心の窓」とも言われるように、昔から“目”は人間の精神活動と密着したものと考えられてきました。

今回の企画展では、この“目”に注目し、目薬や、人間と目の病との関わりをとりあげます。くすり博物館収蔵の資料に加え、東京都の原田威夫氏より寄贈された目薬の製造と宣伝に関する資料を、初公開いたします。

原田氏の資料は、目薬だけに比較的小さいサイズの小さな資料が多くみられます。しかし、その語るところは大きく、その声に耳をかたむけていただけましたら、幸いに存じます。

### 薬袋・薬品

明治時代、「安の目薬」を製造していた原田臺 (=台) 造氏は、研究熱心だったようで、有名な目薬・近在の目薬も多く集めています。

この目薬の容器には、いろいろな種類があります。それは時代とともに移り変わっていった証拠であり、同時に使い方の変化をも示すものでした。

とみやめくすり (明治時代) ▶  
貝殻の容器に練り薬状の目薬が入れていました。売薬印紙がわりの収入印紙が貼られています。

#### 原田臺造氏

初代臺造氏は大正8年に70歳にて、また二代目臺造氏は昭和18年に98歳で亡くなられています。  
▶印が原田氏ご寄贈の資料です。



元祖安の目薬 (裏面) ▶  
「粟一粒ほど」の練り薬状の目薬を下まぶたに点すと書かれています。

▶元祖安の目薬 (明治中期以降)  
「のぼせめ、ただれめ」の他、「やけど、きりきづ (傷)」にも効くとうたわれています。



原田水 (明治時代) ▶  
びん入りの液体の目薬です。びんの表面に薬の名前が刻印されています。紙看板には「世二安ノ目薬ト高稱ス」とあります。



## 看板

「眼病一切之良劑 (= 劑)」「眼病一切 平癒請合 (へいゆうけい)」………  
 実際の効き目はともかく、眼病にかかっている人がこんな看板を見たら、この目薬にすがってみたいと思ったことでしょう。

(時代/サイズ: cm)



△御めあらひ薬  
 (大正/47×92)

▽不動目薬  
 (明治/71×23)  
 不動明王の剣が商標  
 だったようです。



△神力散 (明治~大正/84×84)  
 円形の大きなくすり看板は珍しいものです。

▽大学目薬  
 (明治~大正/51×39)  
 学者風の登録商標は、今でも用いられています。



晴光水▷  
 (明治/69×24)  
 横文字を使って、舶来の薬品の雰囲気を出そうとしたのでしょうか。



◀ (明治/68×25)

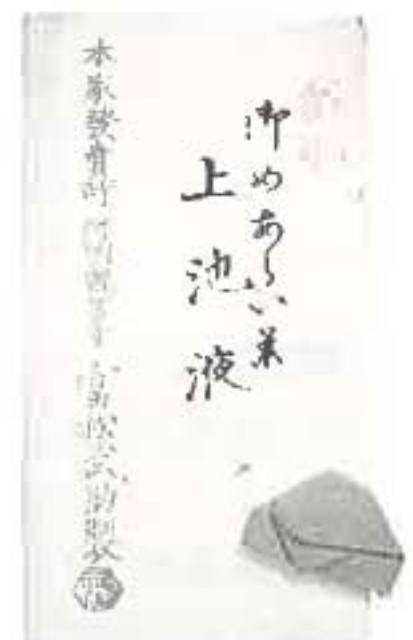


▲安の目薬 (明治/63×22)  
 広島原田臺造氏が製造していた目薬です。眼病のほか、「痔瘻病=効ある」と書かれています。

真珠散▷  
 (明治/81×29)  
 木製の看板の下書き  
 きと思われます。



上池液  
 薬包紙に入れられた粉薬で、くすり  
 を水に溶かし、その上澄みを点眼す  
 るくすりだったようです。



## 紙看板

紙製の看板です。ポスターのように壁に貼られたものでしょうか。

## 製薬道具

他のくすりと同じように、粉末の原料をふるいにかけて、処方にしたがって何種類かの原料をさじで調合し、混ぜ合わせます。

目に用いるものですので、軟膏状にするにしても水薬状にするにしても、原料の粉末は細かくしなければなりません。したがって、原料は裁断刀で細かく刻まれた上、更にふるいにかけてられるのです。ふるいの目も大変細かくなっています。また、ふるいを動かしたとき、細かい粉末が舞い上がらないよう、ふるいの上にふたがついています。(右の写真: 31×22×15)

軟膏状のくすりにするときは、原料に“つなぎ”の働きを持つものを加えよく練り混ぜます。乳棒の中には、練ったときにこびりついたくすりが残っているものがあります。均質に混ぜ合わせるためには、相当の労力と時間を必要としたことでしょう。



## 版木と印刷

江戸時代から薬袋や紙看板、錦絵広告といったものは、すべて木版で和紙に印刷されました。明治以降には、木版のほか、石版・銅版も加わりました。



(版木とその刷りもの 19×14.5)



## 『医薬』これこれ抄(5)

今日のような、液体の目薬の始まりは、明治時代の目薬「精錡水」にありました。

この「精錡水」を製造・発売したのは、明治期の実業家・岸田吟香。画家・岸田劉生の父でもありました。吟香の事業は、東京ー横浜間の定期航路開通から東京日々新聞の記者生活まで、様々な分野にわたりました。中でも、この「精錡水」の製造・発売は吟香を有名にしました。

慶應元(1864)年、横浜在留の宣教師であり医師であったヘボンが、1ヶ月あまりわずらっていた吟香の眼病を、目薬を用いてわずか1週間ほどで治してしまいました。これがきっかけで、ヘボンの

『和英語林集成』出版に協力もし、また目薬の処方を伝授されることとなりました。

慶応3(1867)年に、「精錡水」と名づけられたこの目薬を販売。明治8(1875)年には、銀座で楽善堂という薬舗を設け、「精錡水」のほか、“楽善堂三薬”という3

「精錡水」が明治時代の目薬の代名詞のように有名だったのは、ひとつには、吟香の宣伝が上手だったからと言われています。新聞に講演の形の広告を署名入りで連載したり、目をひくデザインの錦絵広告を製作したりしました。

なお、「精錡水」の名は、この目薬の主成分・硫酸亜鉛の中国名を中国風に発音すると「シンキ」となることから名づけられたと言

## せい き すい ぎんこう 精錡水と岸田吟香

種類の薬、小児薬・キンドル散なども販売しました。

なると言われています。



◁精錡水  
日本で最初の液体目薬です。

楽善堂三薬の錦絵広告▷  
壁に広告文が書かれているユニークな広告です。



◁両やく見立競  
歌舞伎役の名「役」者と名「薬」のかけ言葉を錦絵にしたもの。中央下段が精錡水。



## 容器と衛生

貝殻の容器の目薬が固まってしまったとき、例えば「寒氣(=氣)の時かたまり用ゐ難きときは唾にてとき(=溶き)用ゆべし」と書かれています。唾の中にも雑菌が住んでいると知っていると、これはちょっと心配な使用方法です。

一方、同じ薬袋に「眼は冷水にて度々洗ふを良とす」ともあります。ここでは、逆に、洗眼の大切さが既に認識されています。

別の目薬の効能書には、病気にかかっている目の膿やヤニなどが筆や

容器につくと、くすりに“毒”、つまり異物や菌などが混じってその品質が悪くなることや、それが原因で軽くてすむはずの症状も、汚染されたくすりのために重症になるおそれがあることが認識されています。

このように衛生に関する常識は、少しずつ進歩、変化してきたのでしよう。

### ◆◆◆原田威夫氏ご紹介◆◆◆

昭和5年生。慶応義塾大学経済学部卒業。現在、日石兼松(株)社長。昨年「安の目薬」関係資料をご寄贈いただきました。

### 企画展解説リーフレットを 作りました

今回の企画展では、展示に合わせて解説リーフレットを作成しました。本号の『だより』は資料の紹介が中心です。読みながら展示をごらんいただくとご理解がより深まるかと存じます。

希望者の方に無料でお配りいたしますので、ご利用ください。

## とびっくす

### ◆資料の貸し出しがありました

大阪人権歴史資料館(リバティ大阪)では、特別展「猿の文化史」が開催され、くすり博物館の猿頭霜(えんとうそう=サルの頭の黴)が展示されました。人間と猿とのかかわり、生活文化の中でのサルの役割、猿の伝統芸能に関する展示が、1992年10月20日から12月23日まで公開されました。

滋賀県栗東町にある栗東歴史民俗博物館では、1992年12月19日から1993年1月31日の間、企画展「江戸の看板——文字のメッセージ——」が開催されました。くすり博物館からは、神教丸の大きな看板など12点の資料が貸し出されました。滋賀県は近江の国と呼ばれていた昔、製薬が盛んであり、また東海道・中山道の2街道を中心に商業でにぎわっていました。今回の企画展も、その頃の看板を中心としたものでした。

### ◆夏休みこども教室のお知らせ

今年も夏休みに催しものを行います。日程は次の通りです。

①7月31日(土)

②8月1日(日)

参加希望者はくすり博物館までお問い合わせください。

### ◆キハダがやってきました

川島町の豊田久次様から薬草園にキハダを5本いただきました。幹の直径が30cmほどもある背の高いもので、このほど薬木園の真ん中に植え替えられました。

キハダの樹皮は、はぐと内側が鮮やかな黄色をしており、これを生薬の黄蘗(おうばく)として用います。乾燥させて細かくしたものを煮詰めていくと、真っ黒のどろどろとした苦いものができます。これが陀羅尼助や百草のもととなります。

## 新収蔵資料

ご寄贈いただいた貴重な資料の中から、植物画の資料をご紹介します。

東京都の伊吹直登様より、お父様の故・伊吹高峻氏の描かれた植物画をたくさんいただきました。

高峻氏は、明治薬学校をご卒業後、薬局にお勤めのかたわら植物の研究を続けられ、後に東京薬学専門学校で生薬の講義を受け持たれました。

この頃から精密な植物画や生薬の解剖図などを多く描かれ、その画はまとめられて出版されたり、様々な専門書に掲載されたりしました。今回ご寄贈いただいた画は、『邦産薬用植物図譜』(未完)の原画にあたるものです。

### 資料・図書のご寄託・ご寄贈者 ご芳名

家高敏彰 伊沢加恵 伊吹直登  
片桐平智 栢口弘 喜多理  
陳玉麟 原田威夫 日沼正人  
三輪至 山口佳久 山本不二夫  
(敬称略)

ありがとうございました



館長 岩井鑛治郎 学芸員 森裕美(編集担当)・水野加代 学芸員/司書 野尻佳与子・伊藤恭子 庶務 川瀬麻起子  
説明員 高橋千寿・小島敦子 薬用植物園 白井英夫 顧問 青木允夫・逸見誠三郎  
内藤記念くすり博物館 9:00~16:00開館 月曜・年末年始(12/28~1/8)休館